協働の価値：米国の事例から

全米カレッジ・大学協会 上級研究員
大阪大学 特任教授

スーザン・アルバーティン

（「HEADセミナー」ー平成29年11月17日ー の講演より）

はじめに

はじめまして、スーザンです。皆様にお話しすることができ、大変うれしく思います。

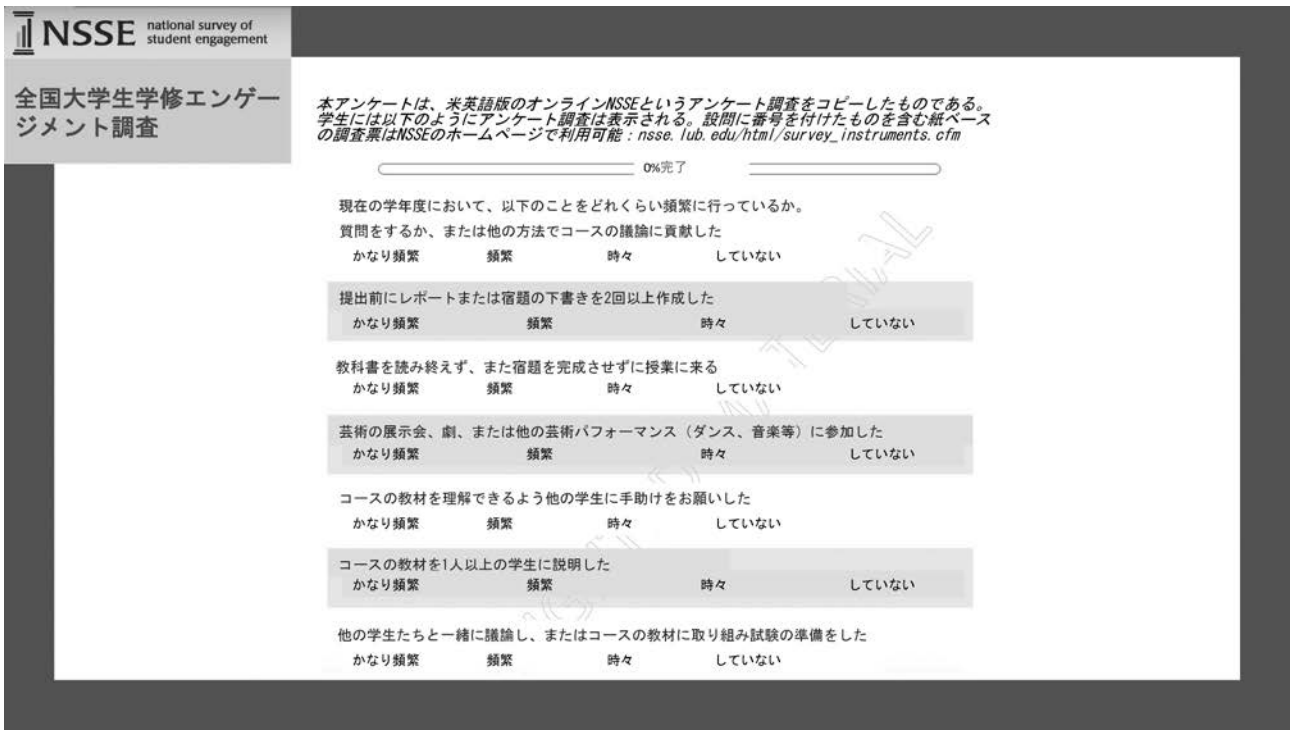
お手元にあるパンフレット（編集部注：AAC&Uの紹介パンフレット）をご覧ください。私が働く全米カレッジ・大学協会（Association of American Colleges & Universities：AAC&U）について書かれています。この協会は1世紀強の歴史があり、学士課程の一般教育と教養教育に従事する世界最大の組織です。私は今までに英語の教授や学部長を務めてきました。その後はAAC&Uで米国国内の仕事をし、そしてこの10年間は国際的な仕事をしています。このパンフレットはプレゼンテーションの後半で使用しますので、その際に参考にしてください。

さて、AAC＆Uでは、高等教育の目的を3つ考えています。人生、仕事、そして市民権もしくは市民参加について考えることです。私がこれからお話しする「協働の価値」というテーマにそれらがどのようにつながっているかを理解してもらえればと思います。

まず、私の同僚である川嶋先生が述べたことに、少し橋渡しをしてみたいと思います。川嶋先生は、日本の高校や大学、教育機関が直面する課題について述べられました。それは、米国でも同様の課題が見られます。変化する労働力や世界情勢、環境などに答えの見えない多くの問題がある中で、学生をどのように育成したらいいのでしょうか？我々は高校、大学を結びつけることが重要だと考えています。しかしこれは米国では大変難しい課題です。ご存じかもしれませんが、米国には教育省がないので、高校と大学の教育における整合性は州単位でとっています。多様性を有した非常に大きな3つの州、カリフォルニア州、ニューヨーク州、テキサス州が高大接続に注力しており、重要な業務である高大接続の教育プログラムの実施やその成果の評価が行われています。まだ道のりは半ばですが、これらの州での試みは大変良いと考えています。

調査データの活用

次に、この前に話をされた和嶋先生は、学生が大阪大学に進学した際に期待していたことと実際に経験したことにギャップがあったことを示しました。我々も同じ問題を抱えており、学生が学修や学校に対しどの程度積極的に関与しているかなどを調査し、結果を活用しています。ご存知のない方のために、NSSE (National Survey of Student Engagement：全国大学生学修エンゲージメント



資料1

調査)【資料1】についてご説明しますと、この調査は2000年から行われており、のべ600万人の学生がこの調査に回答しました。膨大なデータが蓄積されていて、学生に関するポートレイトを個々の教育機関が参照することができます。これは教育改革のため、我々にとって極めて重要です。

我々はネッシデータと呼んでいますが、NSSEのウェブサイト上で事例を見ることができます。そのデータを用いて、大学は教育を改革し、キャンパスでの変化を促進することができます。米国において、変革のためにデータを用いるというのは比較的新しい試みですが、現在では全国の大学に受け入れられています。

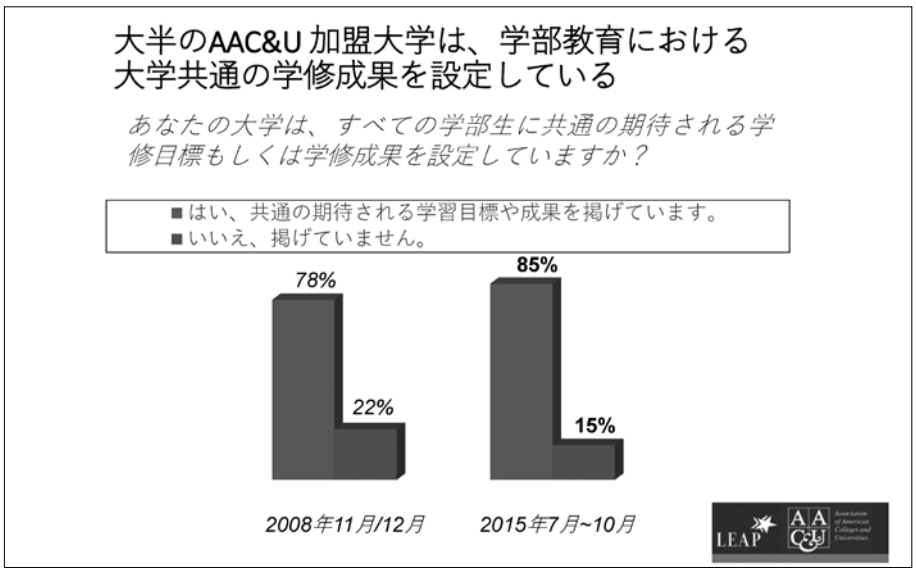
およそ20年前、私が教育改革に携わり始めたころは、誰もそのことについて話したがりませんでした。しかし、今では、質の高い教育を学生の成果につなげるためにデータを利用することに対し、多くの教員は高い関心を持っています。

AAC&Uには、米国の約1,400校の大学が加盟しています。AAC&Uは、大学が学生に何を提供しているか、教育をどのように改善しているかを、大学に対して定期的に調査しています。調査で見えてきたのは、大学において「共通の学修目標や学修成果を設定する」ことの重要性が受け入れられてきているということです。

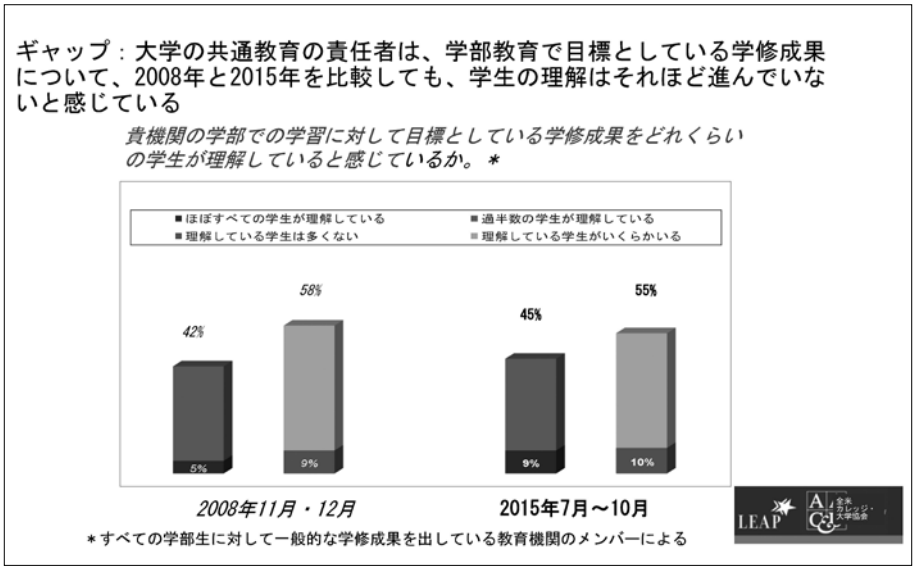
「学修目標や学修成果モデルを設定し、全学生に共通する評価方法がある」と述べている加盟大学は、2008年から2015年にかけて78%から85%に増加しました。【資料2】STEM（科学・技術・工学・数学などの科学技術関連分野）や人文科学などの分野ごとに評価を行うのではありません。大学全体で共通の評価を行うのです。これはとても大きな成長であり、「協働の価値」を共有していこうという大学の意欲、姿勢を示唆しています。

問題なのは、肝心の学生たちが、大学が目標とする学修成果や、大学で学ぶ目的でもある人生、仕事、市民権といった事柄について、必ずしも理解していないということです。「大学とは何であるか？」ということの学生の理解は2008年から2015年にかけてある程度の改善が見られましたが、それほど大きくはありません。【資料3】そこに大きなギャップがあるのです。労働人口の変化により転職の繰り返しが予想されるので、学生には仕事を得るための学修以上の何かを大学で得てほしいと我々は望んでいます。

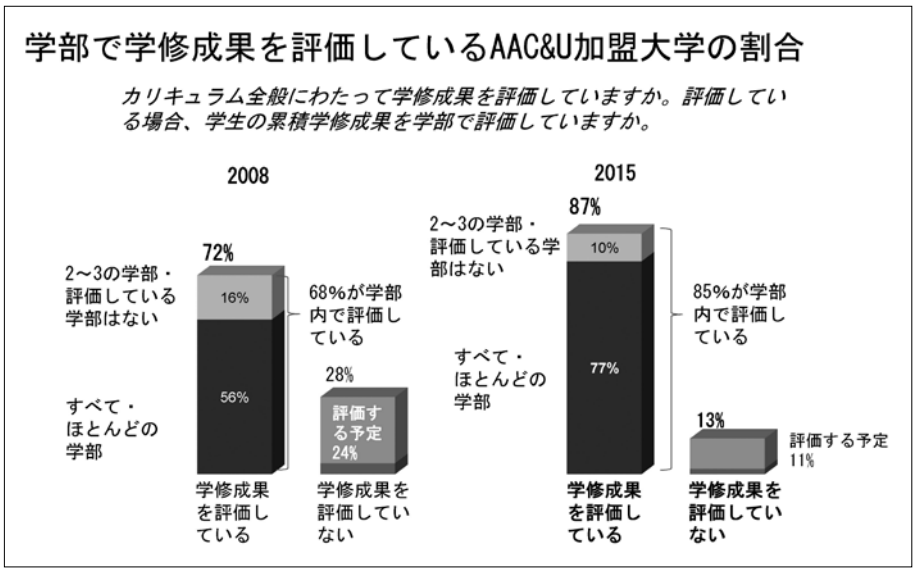
良い兆候もあります。米国では、実際に、教員と


大半のAAC&U 加盟大学は、学部教育における
大学共通の学修成果を設定している
あなたの大学は、すべての学部生に共通の期待される学修目標もしくは学修成果を設定していますか？
■はい、共通の期待される学習目標や成果を掲げています。
■いいえ、掲げていません。
78%
22%
85%
15%
2008年11月/12月
2015年7月~10月
LEAP

資料2


ギャップ：大学の共通教育の責任者は、学部教育で目標としている学修成果について、2008年と2015年を比較しても、学生の理解はそれほど進んでいないと感じている
貴機関の学部での学習に対して目標としている学修成果をどれくらいの学生が理解していると感じているか。＊
■ほぼすべての学生が理解している
■過半数の学生が理解している
■理解している学生は多くない
■理解している学生がいくらかいる
42%
58%
5%
9%
45%
55%
9%
10%
2008年11月・12月
2015年7月～10月
＊すべての学部生に対して一般的な学修成果を出している教育機関のメンバーによる
LEAP

資料3


学部で学修成果を評価しているAAC&U加盟大学の割合
カリキュラム全般にわたって学修成果を評価していますか。評価している場合、学生の累積学修成果を学部で評価していますか。
2008
2015
2～3の学部・評価している学部はない
すべて・ほとんどの学部
72%
16%
56%
68%が学部内で評価している
28%
評価する予定 24%
学修成果を評価している
学修成果を評価していない
87%
2～3の学部・評価している学部はない
10%
すべて・ほとんどの学部
77%
85%が学部内で評価している
13%
評価する予定 11%
学修成果を評価している
学修成果を評価していない

資料4

スタッフの両者が関与し、学生の学修を評価する新たな方法を使用し始めています。これは非常に重要かつ大きな変化です。繰り返しになりますが、これ【資料4】はAAC＆Uの加盟大学における調査結果です。青い棒グラフは学部で学修成果を評価していることを示しています。大変すばらしいことに、2008年から2015年にかけて学生の学修成果の評価をある程度行っている学部は87％に増加しています。これには専攻だけではなく一般教育も含まれています。ということは、何かが起きているのです。人々が協働しているのです。彼らは、学生が何を学ぶべきか、またそれをどのように明らかにするのかについて、より強い合意に達してきています。

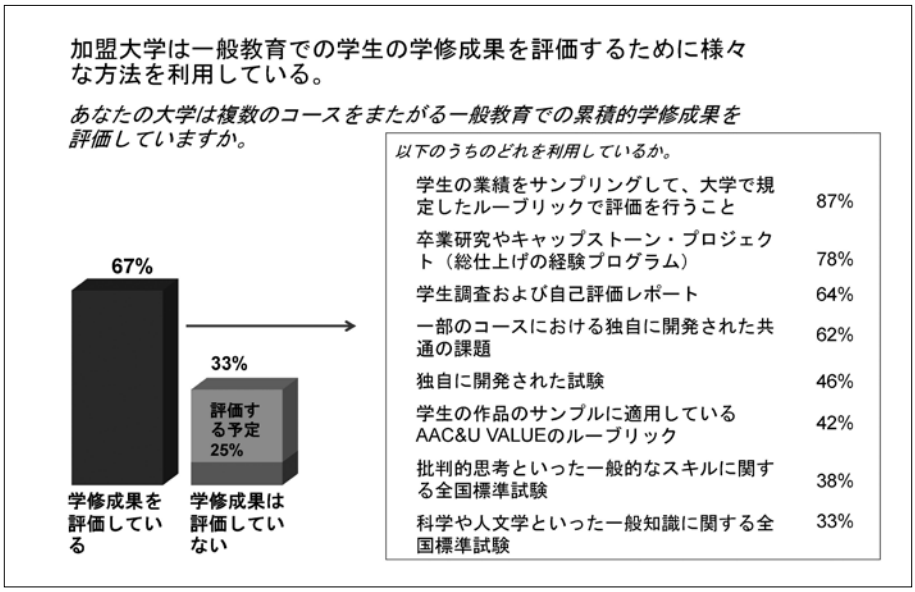
大学における学修成果の評価

さて、学生の学修成果を測るのに、標準化された学力テストはどの程度重要なのでしょうか？AAC&Uの加盟大学は、今ではさまざまな方法で学生が何を学んでいるかを理解しようとしており、それは入試の方法にも影響しつつあります。この図【資料5】の一番下にあるパーセンテージが標準化された学力テストで、それほど重要視されていないことが分かります。大幅に増加しているのは、学生の業績に対して大学で規定したルーブリックで評価する方法で、87％の割合でした。これはとても大きな変化です。

これらの変化は、大学の提供する価値を評価するのに、標準化された学力テストを使うのではなく、自律的に大学の教員たちが、学生が何を学んでいるのかを理解しやすくするように配慮しているということを反映しています。つまり、標準化された学力テストの利用から、ルーブリックなどの基準準拠の評価方法への移行が大きく見られます。

米国で始まったこのような動きですが、日本においても多くの共通点が見られるのではないかと思います。まず、米国では、多様性という場合に、２つの観点から考えなくてはなりません。一つは、文字通りの人口動態による多様性です。学生の多様性は、米国における人種や民族の多様性を反映しており、特にいくつかの都市では、非常に多様性があります。私が住むワシントンDCの郊外にあるコミュニティーカレッジでは、学生が話す言語が100以上にのぼります。我々の願いの一つは、さまざまな種類の高校から多様な学生が大学に進学してもなお、共通の学修成果に到達することです。これはとても大きな挑戦です。

人口動態以外のもう一つの多様性は、認知的な多様性です。先ほどの和嶋先生は認知科学者ですが、認知科学の観点からみるとき、我々はいわゆる入学試験でよい点を取れる学生だけでなく、様々な認知的なタイプ、すなわち理論ではなく実際的な事を好んだり、創造的だったり、いわゆる「知恵」が働く



資料5

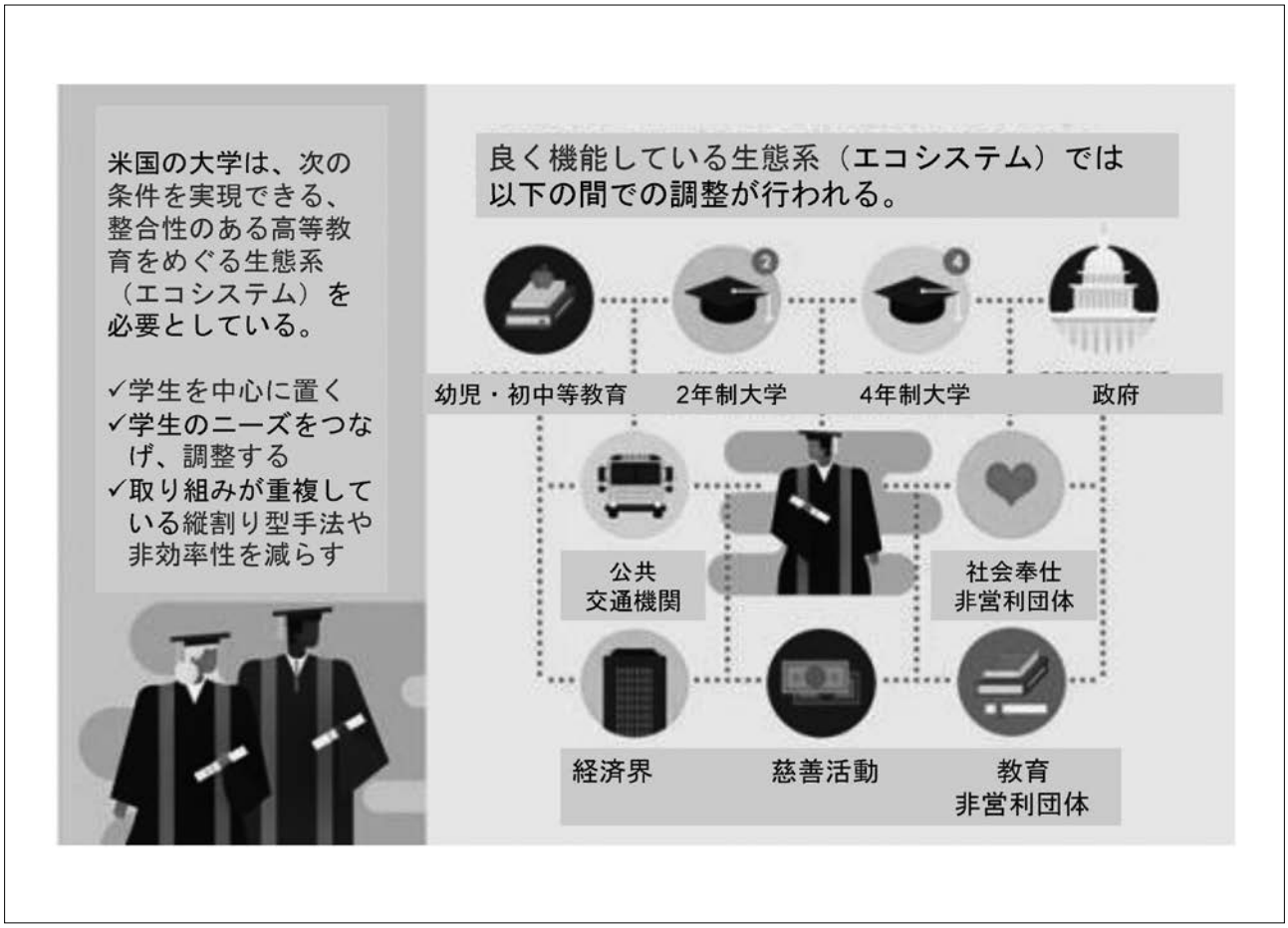
学生を受け入れようとしています。なぜなら、我々は人間の知性が多岐にわたることを知っているからです。家族に大学卒業者のいない学生は、入試における標準化テストにうまく対応できない傾向がありますが、彼らは高度な実際的スキルを持っていることもあり、我々としては彼らが成功する方法を見つけたいと本当に思っています。我々にとって、学生の創造性と起業家精神を育てることはとても重要で、最も注意を払うべきことです。

米国における高等教育機関の理想は、多様な学生を大学に受け入れ、導き、全ての学生がそれぞれに適した共通の学修成果を上げることです。どこの出身の学生であろうが、です。そのための課題は多くあります。白人の学生と有色人種の学生との間においても非常に大きなギャップがありますが、そのギャップを減らすために努力しています。

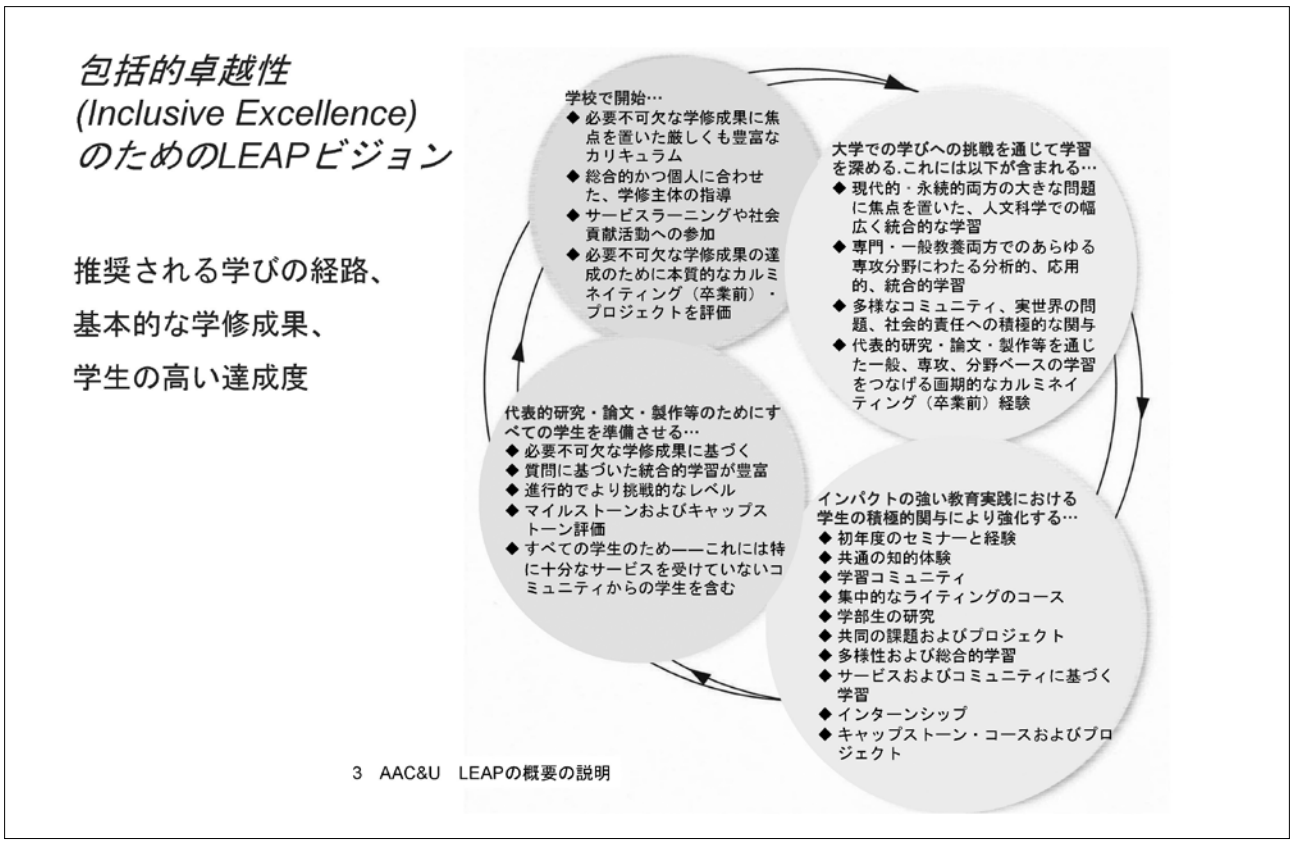
コミュニティの中での学修

日本語には大変訳しづらいのですが、「エコシステム・アプローチ」を学生の学修に取り入れようという声があります。この図【資料6】にあるように学生の学びを、地域社会および社会的文脈すなわち社会を構成するさまざまなシステムの関係性の中に位置づけて考えることで、我々がどのように初中等から高等教育まで協働してより良い教育活動ができるかのヒントにできるのです。この点で、私は教育と大学入試を連続したものとして捉えるべきだと考えています。そして、学修の成果を向上させるために、このシステムをどのように連携させるかについて体系的に考える必要があると思います。図のように、コミュニティにある社会システムの中心に学生を置くと、あらゆる種類の可能性や重要なつながりが見えてきます。

コミュニティの中で、幼稚園から高校までの学校、大学、医療、慈善活動を結びつけるシステムが必要です。そして、小中学校から大学まで学修を一致させて、同じ成果を共有するのです。我々はこのことを推奨しています。困難ですが、これは実際に



資料6



資料7

可能なことです。

この図【資料7】を見てください。この図は、AAC＆Uが2005年ごろに作成したもので、学生の学修に対するシステム全体のアプローチを想定しています。それは小中学校で始まり、大学を経て、全ての学生が高水準の主体的な学修などを理解していくという考えに基づいています。これを見ると、講義や標準化テストを超えて、全学生は主体的な学修プロジェクトに参加する機会が多分にあることが確認できます。我々は、それを「シグネチャーワーク（卒論、卒業研究や製作など）」と呼んでいます。それは、まるで学生が成果物に自分のサインを書くかのようだからです。

学修プロセスの中の大学入試

私達は学生に対し、高校から始まり大学を経て、できれば大学院で高度な研究まで進んでほしいと思っています。これらが飛躍した発想であると承知していますが、できればそうしてもらいたいと思っています。そのようなつながりをもって高校と大学の変革を考えてみると、大学入試を大学での学修プロセスの最初のステップとして捉えることは賢明であり、また論理的であるといえます。

今の米国では、大学入試は学部からは切り離されていて、タコツボのように全く異なる組織で行われています。日本の入試は米国と異なる方法で行われていますね。アメリカでは、入試事務局（アドミッションオフィス）が学部教育の内容に関わり、学修との整合性や連結を持たせることは非常に困難となっています。しかし、入試を大学の学位を取得するための学修ステップと考えると、全てが一つのシステムとなります。

では、入試が学生の学修や教育にどのような影響を与えるのでしょうか？入試の合否判断は、大学における学修成果と同様に学生の幸福にどのような影響を及ぼすのでしょうか？ここに相互的・協働的な関係を構築できれば、多様な学生により良い教育を実践できるかもしれません。

これもまた、大学の目的とは何かという疑問に帰結します。大学での学びには学位や仕事のために単位をとること以上に、もっと多くの意味があります。複雑な世界、変化に富んだ社会に適応できなけ

ればなりません。

我々は、学生が大学に進学する準備ができていないと、長年にわたって言い続けてきました。準備はできていなければならないのです。しかし、その考えを転換して、我々が教育者として学生の準備について考えることができれば、入試から卒業までのプロセスについて異なる考え方を持つかもしれません。

実際に私がそうでした。私は、この話題について書かれた『Becoming a Student-Ready College』という本の著者の一人として、「学生は準備ができていない」ということと、「学生たちのために我々が準備しなければいけない」ということの違いについて長年にわたり考え続けてきました。我々ができる理想的で最善な方法の一つは、大学の入試事務局と学部の教職員が入試プログラムにおいて協働することであると考えます。

教職協働

これらの目的を念頭に置いて、日本の大学と米国の大学が協力して目標を達成することができると私は考えています。両者は、今では学生の幸福、進学の目的や価値観、すなわち大学教育の目的について考えることの重要性を共有しています。残念ながら、これまで我々は教育現場を不安にさせるような指導をしてきたこともありました。縦割り型思考の変革には大きな不安を伴います。私が米国の教員と話すと、いつも彼らは「大学全体で共通の評価を使うのは良いことと思います。しかし組織が縦割りなので、それをどのように実現するのかは難しい問題ですね」といいます。

大学全体で協働するには特に熟練したリーダーシップ、つまり一つ一つの組織をつなぎあわせる能力が必要ということです。そして文化や教育の価値観を共有する必要があるということを強調したいと思います。非常に思慮深いリーダーシップとともに、それぞれの組織で何が起きているのかを理解できる中間のリーダーも必要だと思います。そうしなければ、協働を助けることができません。

このプロセスの中で、とても難しい疑問に答えなければなりません。私はロバート・スタンバーグという著名な心理学者から、改革や大学入試、大学での学修の考え方について影響を受けてきました。彼は驚くほど創造的な仕事を米国で成し遂げました。

彼は、大学が異なる文化や能力を持つ幅広い学生を受け入れたとしても、選択式試験で高得点を取るために暗記を奨励するといったような画一的な方法で指導を行えば、学生を失敗に導いてしまうという研究成果を発表しました。この事実を証明するエビデンスはとても多くあります。それにより、実際にアドミッション・ポリシーが学修成果に影響を与えているかどうか、教室での多様性や学生の学修方法への対応について、本当に協働できているのかを考えることができるはずです。

学生の学修能力は、実際に彼らが指導された方法から影響を受けます。暗記に価値が置かれた場合、よく暗記ができる学生が良い成績を修めます。一方、指導が実践に基づくものであれば、より行動力のある学生が良い成績を修めます。こうしたことから、発想力・創造力の高い学生を成長させたいと望むのであれば、教育者と協力して指導方法を変え、こうした方面への学生の成功を最大化することができることでしょう。

これこそが、まさに私の所属するAAC&Uの使命です。どのようにそれを行うのでしょうか？入試に関わる教職員を含めた全ての教育者がそれを行うために、我々はどのような支援を提供することができるのでしょうか？

1つの方法は、リーダーシップの構築、橋渡し、価値の共有を通じて、キャンパスでの協働について今までとは異なる考え方をしてみることです。これらの考え方は、米国では比較的新しいものであり、本著でも触れられています。教育者自身が今までと異なる考え方をすれば、学生にとっても異なる結果をもたらすことになるのです。入試に関与する全ての職員は、業務内容や立場の違いに関係なく、自分自身を教育者とみなすことをお勧めします。全ての教育者と教育機関は、入試の目標と実践に精通している必要があると考えています。受け入れた学生には、成長してほしいと願うものです。

専門能力の開発には立場を問わず、包括的な投資が必要です。人々は自分の仕事上の立場に関係なくお互いに助け合うことができます。実際には上級管

理者がこのモデルをサポートする必要があると我々は考えています。しかし、トップダウン式のみでは、キャンパスではうまく機能しません。現場に近い教育者も協働の価値を理解する必要があります。これらの考え方はAAC＆Uが長年にわたり発信してきたことであり、教育の組織はボトムアップ・トップダウンが機能するコミュニティでなければなりません。

事例：ガウチャー大学

入試を学生の学修成果に結びつけるために、非常に創造的で斬新な試みを行っている大学の例を挙げたいと思います。ガウチャー大学という教養大学で、メリーランド州ボルティモアのすぐそばにあります。

私は先ほど、米国では通常、入試事務局は教育プログラムには関わらないと述べましたが、ガウチャー大学では入試担当者と教員が一緒に仕事をしています。現在、彼らは非常に独創的で先駆的な方法で多様な学生を受け入れています。例えば、ガウチャー大学の入試では、学生はACTやSATなどのテストスコアを選考基準に含めるか否かを任意に選択できます。【資料8】

もう一つ、ガウチャー大学の特徴的な入試の試みとしては、従来の出願プロセスで自己をPRできない学生のために、パフォーマンス動画や芸術作品などを受け付けていることです。ガウチャー大学は小規模の大学で、入試にパフォーマンスを用いる学生はそれほど多くはいませんが、大学が重視する多様性の確保に非常に役立っています。

私は今回の日本での仕事のために、実際に同大学の入試部長に電話し、話を聞きました。彼は、教員と入試スタッフが連携するための取り組みについて話してくれました。彼らは、例えば入試の小論文や提出書類の評価ルーブリックを開発するために、ライティングを教える教員の協力のもとに取り組んでいるというのです。私は数十年にわたってライティングを教えてきた英語教師ですので、なおさら共感を抱きました。彼らは職能上の立場を超えて集まり、自らの手でルーブリックを作成し、全員が使用する方法を学び、一緒に訓練を行う。それはすばらしいものであると感じました。教員が入試のさまざまなプロセスに関与しているのです。この事例は特に入試をデザインするあらゆる段階でよく考えられたものであるといえます。恐らく米国全体の入試で、今後同様のケースが見られるようになるのではないかと考えられます。【資料9】

入試と教育

要するに、入試プロセスと教育プログラムは相互作用的な関係にあるということです。私は、この考え方を高校にも導入できるのではと実は思っています。そして、そのような関係性ができれば、「学生の経験」の新しい側面が見えてくるようになるでしょう。私は英語の教授で、「物語」が大好きですが、大学で起こっているとされるロジカルな物語、つまり学生が入学し、学び、卒業するということにおける成果は、アウトプットではありますが、アウトカムではありません。ここでいうアウトカムとは、学生が継続的学修者になることであり、大学が残りの人生にインパクトを与えることなのです。この一連の学修の流れをつないでいくためには、入試担当者と教育者に共通の理解が必要であり、その成功は我々が「協働できるか」にかかっています。【資料10】

私は、入試担当と教育実践者を結びつけ、それらが協働できるような推奨事項を提案したいと考えてきました。時間をかけて、大学教育で何を評価しているかを調査し、大学の目的を考えることは、大変参考になります。私は多くの時間をかけて、実際に大学教育で何を重視しているのかを教員と話し合い、ともに評価していますが、その実践例をいくつか紹介いたします。これは作り話ではなく、実際に行われていることです。

お手元のパンフレットをご覧ください。左側のページに「エッセンシャル・ラーニングアウトカム」と書かれています。【資料11】これを、米国の中でコンセンサスを得るのに20年近くかかりました。これが「大学で学生が学ぶべきもの」であると、大学教員や研究者のリーダーの方々から賛同いただけると私は確信しています。これらが20世紀に我々

実践例

学生になる | ガウチャーに出願する

ガウチャーに出願する

ガウチャーでの選考過程は高度に個別化されています。入学審査委員会は、学生の学力向上だけでなく、標準化されたテストの点数では反映されない資質――学生の個人的資質や才能、関心、課外活動への関与にも細心の注意を払っています。標準化されたテストは、ガウチャーの選考課程では任意になります。

出願プロセスは、従来の大学1年生、転校生、留学生、ホームスクーラー、メリーランド・スカラーズ・プログラムの資格がある学生、そして社会人学部生によって異なります。出願手続きにおいて漏れがないように何が必要かを必ず確認してください。

従来の出願プロセスではご自身のことを完全に伝えることができないと思った場合は、ガウチャー・ビデオ出願をご検討ください。

訪問学生、またはガウチャーでの学位取得を求めていない場合は、コモン・アプリケーションではなく、科目履修候補（PDF）のフォームを使用してください。二つ目の学士号取得を目指しているのであれば、こちらのフォーム（PDF）を作成してください。

ガウチャー入学に関する連絡先：電話：1−800−GOUCHER（内線6100）電子メール：admissions@goucher.edu

資料8

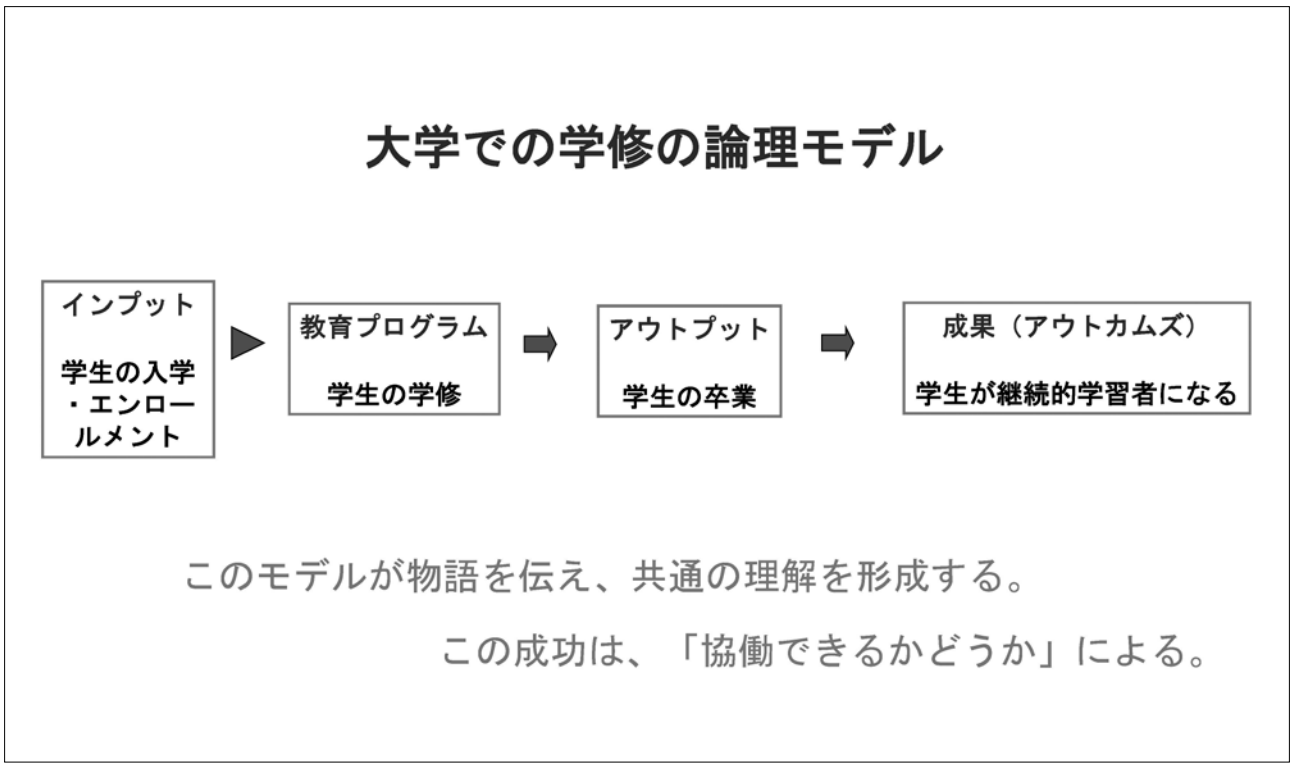
ガウチャー大学：

「本学の入試チームは、入試プロセス全体を通じて必ずガウチャーの学生経験のあらゆる側面を正確に体現するように、定期的にさまざまな職能上の枠を超えたチームおよび会議によって、学長、教員、そして職員で連携をはかっています」ー *マーティー・スワイデル*

相互プロセスは以下を含む。

- 入試エッセーを採点するための評価ルーブリック。この評価ルーブリックは、ライティングの教員の助けで企画・作成され、またAO職員に研修を行っている。
- 教員を日々の説明会に関与させる。教員は講義を学生訪問者に公開し、Admitted Students Dayというプログラム作成に参加する。
- 選ばれた教員および学生生活に関わる職員が、春に学外で行われる入学者イベントに参加する。
- また、教員は「入学者キャプテン」プログラムにより、合格した学生にメールをし、電話をかける。

資料9



資料10

が考えていたものとは異なるのは、知識、スキル、社会への義務と責任がうまく実践的に応用され、統合されているということです。知識は現存する問題やより大きな文脈での社会課題への関与に焦点を当てています。スキル教育はカリキュラムを超えて全体的に実践されます。また、我々は各加盟大学に、個人的および社会的な責任については、多様なコミュニティでの問題解決に基づき、学生が考える事を支援するように推奨し、そのように各加盟大学は学生に働きかけています。

大学教育の目標は、専攻分野で限られたトレーニングを行うことだけではなく、さまざまな分野で学修を統合して適用できるようにするということです。パンフレットには、この特定のスキルと責任について詳しく説明があります。その内容は米国ではコンセンサスがとれていますが、日本の大学の学修成果としてコンセンサスが得られるのかは分かりません。少しだけ時間をとりますので、これらの質問【資料12】についてお互いに話し合って考えてみてください。その際に、何がもっと大事なのか、また何か欠けているものはないかと考えてみるといいかもしれません。（編集部注：時間を取って、自分で考えたのちペアワークを会場で行う）

さて、皆さんの中には、ICTの発展とか、創造性に関してもっと注意を払うべきだと考える人がいるかもしれませんね。これらのアウトカムも、大変重要なものだと思いますが、時間もありませんので、今ここでご意見を言う方が居なければ、後のパネルディスカッションで議論したいと思います。これらの学修成果の議論は、皆さんの役に立ちましたか？日本でも皆さんの大学で同じようなことが言えると思いますか？

VALUE ルーブリック・DQP

学生の学修成果について話し合う際に、我々が開発した非常に実用的なルーブリックをご紹介します。これは VALUE ルーブリックと呼ばれており、英語版と日本語版があります。実際にこれらを用いて学生の成果物を評価し、学部全体で共有してみてください。

例えば、これ【資料13】は米国の教員チームによって作成された、文章表現に関するVALUE ルーブリックです。そこには複数の学修基準が示されており、学生がどのように文章表現をすべきであるかを記述しています。これは文章表現を最高のパフォーマンスに導くベンチマークです。これらのルーブ

学修成果（ラーニング・アウトカムズ）のエッセンス

- ***人間の文化や、物理的・自然世界に関する知識***

  → 社会的に大きな問題や永続的かつ現代的なものに**焦点を当てる**

- ***知的・実践的スキル***

  →カリキュラム全体を通し、段階的により難しくなる課題やプロジェクト活動、評価基準を通して培われる**実践能力**

- ***個人的・社会的責任***

  → 実際の社会的課題と多様なコミュニティへの主体的な**参画**

- ***学修内容の統合と応用***

  → 新しい条件や複雑な問題に対し、既存の知識やスキルと責任感を持って取り組むことで**示される応用する力**

資料11

Think, Pair, Share Questions（みんなで考えてみましょう）

- これらの学修成果について考えてみましょう。これらの学修成果はあなたの大学が定義する学修成果に対応していますか？
- どの学修成果があなたにとって最も重要ですか？
- どの学修成果が含まれていませんか？
- これらの学修成果を使って、入試に関わる教職員が協働する事を支援できるでしょうか？

資料12

リックは全て、重要な学修成果と一致しており、現在は世界中で用いられています。皆さんが共同してできることとして、実際にVALUE ルーブリックを使って学生の文章を読んでみてください。そうすると、その学生の今後の学ぶべき事柄の多さに気づいて驚くでしょう。これらはAAC＆Uのウェブサイトにありますので、入手して使ってみてください。

その他に皆さんにお勧めできるものとして、米国のNPO法人が開発した「学位資格プロフィール（Degree Qualification Profile:DQP)」を紹介します。これは、米国の大学で利用が拡大しているもので、学位を出す基準を大学の中で決める際に、コンセンサスを得るためのツールとして非常に役に立ちます。DQPはLumina Foundationという非営利団体が開発しているもので、ヨーロッパのボローニャ・プロセスとチューニング（編集部注：EUの大学における、学問分野別学位の標準化・共通基準化のプロジェクト）に関係していますが、DQPは大学での一般的な学修に関するものです。DQPには、短期大学士、2年制大学、準学士号、また学士や修士、それぞれのレベルに応じて、学生が文章コミュニケーションについてどのようなことができるべきであるかを理解しやすく、レベル記述（定義）が記載されています。現在では学士課程の60%の大学で、DQPを参照しており、学修されるべきものと評価内容を一致させるのに役立つ極めて価値のあるツールです。グリッド全体を無料でダウンロードすることができ、私が示した重要な学修成果に非常によく似た成果が記載されています。

最後に

我々には、人々を結ぶために使える優れたツールがたくさんあります。学生の成果物を用いて、同僚とともにその成果物に関することや、また学修やパフォーマンスで何が本当に重要であるかと話し合うことほど、エネルギーをもらえて楽しいものはありません。皆さんがそれについて考え、実施できることを願っています。どうもありがとうございました。

文章表現に関する VALUE ルーブリック
詳細は、value@aacu.org を参照

定義

文章表現とは、考え方を文章で表し表現することを指す。それには、多くのジャンルやスタイルを学ぶことが含まれる。様々な作文技能や、文、データ、画像を調和させる作業も含まれる。文章によるコミュニケーション能力は、カリキュラムの中で繰り返し学習することで身に付くものである。

単独の課題、または複数の課題を総合して、ベンチマーク（基準 1）に達しない場合は、0 点と採点することを推奨する。

	最終基準	中間基準		ベンチマーク
	4	3	2	1
文章の背景と目的 文章の読み手、目的、周囲の状況などの考慮を含む	課題の背景、読み手、目的を完全に理解し、すべての要素に注意を払う。	課題の背景、読み手、目的、焦点を適切に理解している。（課題が読み手、目的、背景と適合している）	背景、読み手、目的、課題を意識している。（読み手の認識や仮説を考慮し始める）	背景、読み手、目的、課題に対し最小限の注意しか払っていない。（教員や自分が読み手だと考えている）
内容の作成	テーマに関する精通度を示す、適切で関連性や説得力のある内容を使用して、書き手の理解を伝え、文章全体を作成する。	専門領域の範囲内で考え方を探求するため、適切で関連性や説得力のある内容を使用して、文章全体を作成する。	文章の大部分において、考えを発展させ探求するため、適切で関連性のある内容を使用する。	文章のいくつかの部分において、簡単な考えを発展させるため、適切で関連性のある内容を使用する。
ジャンルや専門領域の慣例 特定の書式や学術分野の文章に共通する公式または非公式な規則	構成、内容、表現、方式、形式など、特定の専門領域や課題に応じた幅広い慣例に注意を払いうまく使用する。	構成、内容、表現、方式、形式など、特定の専門領域や課題の重要な慣例を一貫して使用する。	基本構成、内容、表現、など、特定の専門領域や課題に応じた慣例に従う。	基本構成や表現において一貫した方法を使用するよう努める。
情報源とエビデンス	文章の専門分野やジャンルに応じた適切な考え方を発展させるため、高品質で信頼できる関連した情報源をうまく使用する。	文章の専門分野やジャンルにおける考え方を裏付ける、信頼できる関連した情報源を一貫して使用する。	文章の専門分野やジャンルに適した考え方を裏付ける、信頼できる関連した情報源を使用するよう努める。	文章において、考え方を裏付ける情報源を使用するよう努める。
構文や機構のコントロール	読み手に意味をうまく伝える、明確で流暢でほとんど間違いのない品格のある言語を使用する。	読み手に大まかな意味を伝える、分かりやすい言語を使用する。使用する言語にはほ　とんど間違いがない。	読み手に大まかな意味を明確に伝える言語を使用するが、いくつかの間違いがある。	使用する言語に間違いがあり、時として意味が正しくない。

本Valueルーブリックは関西国際大学（大学間連携共同教育推進事業）により和訳されたものです。http://renkei.kuins.ac.jp/approach3.html

資料13